



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	趣味縁研究の系譜と現代社会におけるその現れの一例：群馬県前橋市「前橋〇〇部」の事例から
Author(s)	加藤, 康子
Issue Date	2017-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67655
Rights	本論文は、文化経済学会<日本>より許諾を頂いて転載するものです。
Type	journal article
File Information	kato02.pdf



趣味縁研究の系譜と現代社会におけるその現れの一例

—群馬県前橋市「前橋〇〇部」の事例から—

加藤 康子*

日本語要約

本研究が対象事例として注目する群馬県前橋市の中心市街地では、商店街の遊休不動産を利用して、民間非営利の市民集団やアーティストが、趣味縁やアートの拠点を構える動きが見られるようになった。本稿は、従来は社会学の領域で扱われてきた趣味縁を、概念の系譜を再確認し、そのうえでまちづくりの文脈において捉え直し、新たな理論的視座を提供することを目的とする経験的研究である。

キーワード

趣味縁、多様性、地域再生、趣味、人間関係

Summary

This experimental study attempts to explore practical ways to restructure and maintain the vitality of Central Town Areas through art or leisure activities. It employs the qualitative research approaches of participant observation, hearing investigations and analytical examinations to focus on the case of "Maebashi MARUMARUBU" of Maebashi, Gunma. The study utilizes empirical research in an attempt to provide a new theoretical perspective to research on hubs of leisure activity by reconsidering such studies within the context of City Planning.

Key Words

leisure activity, diversity, City Planning, hobbies, human relations

1 はじめに

本研究は、社会学や文化研究で語られてきた趣味縁をテーマとする市民有志の小集団や個人が、衰退した中心市街地に新たに拠点を構えて活動している事例に着目する。彼らの活動目的の多くは、趣味を巡る活動を集団で行う事による楽しみの最大化である。しかし結果として、エリアに新たなコンテンツをもたらすことで、通行量の増加や空き店舗の減少など、まちづくりの文脈での波及効果が同時に見られる。本研究は、趣味縁の先行研究に照らしてその系譜と特徴とを再整理し、次いで、趣味縁の現代社会での立ち位置について新たに分析を試みるものである。

本稿が着目するのは、近年、中心市街地の特定のエリア

に市民による文化活動の拠点が集積している群馬県前橋市の事例である。市民有志による任意団体「前橋〇〇部」(発音:まえばしまるまるぶ)をはじめ前橋市中心部の商店街で展開されているアートや趣味縁の活動の事例において、参加者が自らの趣味嗜好を追求することを通じて、結果的に地元の人的資源の活性化や周辺の通行量の増加や遊休不動産の再利用などが観察されている。

本研究の方法は参与観察に基づく質的分析と資料調査である。2014年から継続してきた現地調査を中心に、あわせてSNS等の活動記録や2003年以降群馬県内の地域づくり団体の動向を継続調査している友岡の研究(2015)にも多くを依った。

従来のまちづくりのプレイヤーと言えば、大家、店主ら商店街振興組合、地元の商工関係者や地方行政、町内会やPTAなどの地縁組織、まちづくり会社やまちづくりNPO等であった。しかし前橋の事例から見て、今後、趣味縁の担い手達を新たなまちづくりのプレイヤーに加えて考えなくてはならない時代が、すぐそこまで来ている

* 北海道大学大学院国際広報メディア観光学院 博士課程

E-mail: kayanet@mtf.biglobe.ne.jp

原稿受理月日: 2017.3.31

掲載可能原稿受理月日: 2017.7.20

のではなからうか。

なぜ、市民が遊びの時空間において私的な嗜好を追求する趣味縁が、商業空間に波及効果を及ぼすことになるのか。本研究は、趣味縁の先行研究を遡り、その本質を再確認することで、まちづくりの文脈においても立ち現れてくる活性化等の効果について何らかの解を求める事は出来ないかと考えた。本研究は、趣味縁の今日的な現れの社会的な重要性について、新たな視座を提供する契機となることを目的としている。

II 趣味縁をめぐる先行研究

1. 「趣味縁」という用語

「趣味」研究の歴史は、CiNiiにおいても1900年代初頭にまで遡り、領域は多岐にわたり、論文数も数多い。しかし、「趣味縁」を直接論じた研究は1991年の藤田英典の「学校化・情報化と人間形成空間の変容：分節型社縁社会からクロスオーバー型趣味縁社会へ」が最初で、それ以降もCiNiiの「趣味縁」検索でみつかるとの先行研究の数は10件程度である。この1991年から2017年現在までの26年間で、趣味縁は、上記の藤田論文の教育をはじめ、社会学、アニメの聖地巡礼、レジャー・余暇などの領域で論じられて来た。

だが、趣味縁という用語そのものは、藤田論文に先立つ1980年代中盤に、既に登場している。1985年2月に国立民族博物館で行われたシンポジウム「日本人の人間関係」で、「社縁の人間関係」を論じた井上忠司の論考に、初めて趣味縁という言葉が見られる。井上は、当時の社縁の変容を論じるにあたって「社縁の人間関係における結合の契機の特徴から、説明の便宜のうえで、かりに『趣味縁』『選択縁』『情報縁』とよんでおこう」（井上、1987、250ページ）（傍点は筆者）と述べている。そして、続けて趣味縁を次のように説明している。「人々のあいだには、『目的（ないしは目標）達成のために』という“目的志向”もさることながら、『それ自体がゆえに』という“ゆえ志向”の顕著な傾向が認められるのである」（同、251ページ）。「ここでひととき注目すべきことは、同好の士という機縁によって芽生える、つよい仲間意識である。まさに『趣味縁』とでもいうほかはない」（同、251-252ページ）。この時点で、まだ趣味縁という用語は、明確な市民権を得ていなかった様子が窺える。

2. 「趣味縁」以前の先行研究

また、趣味縁という用語こそ使われていないものの、同シンポジウムでは藤井知昭が「クラブ型社会の可能性」と題して、「グループ、サークル、あるいはクラブ等と呼

ばれる趣味を軸とするようなクラブ型の小集団」の日本における系譜を整理している。藤井の論考が扱う同人誌や歌声サークルなど趣味を軸とした小集団は、本研究が着目する趣味縁そのものであり、特に下丸子文化集団や八幡製鉄所などに代表される戦後のサークル文化研究ともパラレルである。藤井によるクラブ型小集団の系譜を簡単にまとめると、以下のような流れとなる。

藤井は、江戸時代の俳諧などの“社”や“連”あるいは“寄り合”などの小集団を自発的なクラブ型集団のプロトタイプとする。その上で、「趣味を軸とするようなクラブ型の小集団が本格的に成立し、一定の活動を定着させてゆくのは大正期の後半」（藤井、1987、185ページ）とする。具体的には、本格的な販売が始まったレコードを購入する受け皿となった音楽同好会、雑誌『赤い鳥』に触発された同人的文芸活動の諸活動、築地小劇場を起点とする演劇グループなどの隆盛であり、いずれも知識階級を軸とした閉鎖性の強い小集団となる傾向があった。だがその殆どは第二次世界大戦とともに消滅してゆく。こうした集まりは、終戦後になって再び息を吹き返す。戦後の民主化と技術革新・高度経済成長の中、労働作業の細分化や職場の身分制の強化などにより、全体的人間性が疎害される事が問題視され始める。そうした「疎外を克服し、全体人間の回復という論理として、上下関係、職域などをこえた一個の人間としての趣味、すなわち文化活動としてのサークルあるいはクラブの意義」（188ページ）が評価されるようになったと藤井は論じる。その具体例として、最盛期の昭和30年代には全国の歌声サークル数は数万とも数十万とも指摘された“うたごえ運動”、国分一太郎などを中心とする綴り方教室すなわち生活記録運動などを挙げている。

こうした文化運動としてのサークル活動は昭和30年代に最盛期を迎え、「一般的には仲間づくり運動として展開され、同時に反体制運動の一翼を担うという半面を持って」いた（188ページ）。その後の60年安保以降、疎外論的仲間作りサークルに替り、本来の趣味を軸とする自己選択的な広範なクラブが無数に誕生するようになる。さらに後80年代には、行政主導の文化団体の育成、民間のカルチャー・センターの拡大と相まって、自己選択的な趣味を軸とするクラブ型小集団が爆発的に増え、活動し始める。この時代、特に主婦層が活動の軸となっており、家事や育児といった旧来の主婦の役割像を超えた自己主張の現れとも言える、と藤井は指摘している（192-194ページ）。

3. 藤田英典の「趣味縁」研究

この1985年のシンポジウムに「学校」の分科会が出

演していた藤田英典は、後にこのシンポジウムでの井上や上野千鶴子らの発表を踏まえ、1991 年に「学校化・情報化と人間形成空間の変容：分節型社縁社会からクロスオーバー型趣味縁社会へ」で趣味縁をキーワードに自説を展開する。藤田は、産業化・都市化と学校教育の拡大に伴って、「社会生活の諸活動が明瞭に分割され、生活の時空間とライフコースもそれに対応して分節化されている社会」(22 ページ)を「分節型社会」と呼んだ。すなわち、近代産業社会は〈職場〉、〈学校〉、〈家庭・地域〉の3つの空間に分割し、生産活動を優位化して、職場や学校といった限定的な社縁関係を拡大して来た。その分節型社会に対置する社会形態として、趣味縁によるクロスオーバー型社会をあげている。藤田は、血縁・地縁・そして社縁の関係とも異質な新しい人間関係を、野田正彰の「情報縁」、望月照彦の「知縁」、上野千鶴子の「選択縁」を紹介しながら、「関係成立と持続の契機としての〈趣味・好み〉を重視して、わたしは〈趣味縁〉と呼んできた」と述べている(藤田, 29 ページ)。そして、趣味縁集団が排他的・閉鎖的な関係に陥りやすい危険性に警鐘を鳴らしつつも、許容的・開放的な趣味縁関係が交差する〈趣味縁クロスオーバー型社会〉に、分節型社会の行き詰まりを超える可能性を見出そうとする。なぜなら、「趣味縁関係は、分節的な構造や制度・組織に基盤をもつのではなく、個々人の〈好み・趣味・意味志向〉に基盤をもつ関係だからであり、そのゆえに、近代産業社会の典型的な活動空間である〈学校〉や〈職場〉の意味秩序とは異質な意味の平面を提供し、人びとに個別的なアイデンティティの基盤を提供する可能性をもっているからである」(30-31 ページ)と藤田は結論している。

4. 浅野智彦の「趣味縁」研究

藤田論文から5年後の2011年、浅野智彦が『若者の気分 趣味縁から始まる社会参加』(岩波書店)を上梓し、公共性、社会参加などの社会学の文脈に照らして、改めて趣味縁を位置付けた。同書で浅野は、池上英子の『美と礼節の絆』(2005, NTT 出版)を引用しながら、趣味縁の源流を江戸時代に遡るとしている。すなわち、「中世後期から江戸時代にかけて進展したコミュニケーション・ネットワークの規模、密度、複雑性の急激な増大は、人々の間にいわゆる『弱い紐帯』を蓄積していった」とする(浅野, 66-67 ページ)。そして「江戸期の趣味のネットワークが、一見固定的で動かしがたく見える身分制の仕切りを越えて人々を結びつける働き、いわば架橋型社会関係資本の働きを持っていた」ことを指摘する。江戸時代の俳諧や浄瑠璃などの美的な趣味を共有する集団が「あく

までも私的な領域での関係にとどまることによって、いわば公的な領域からの隠れ家として機能した」(浅野, 67 ページ)と述べる。こうした「隠れ家の美のパブリック圏」がいくつも存在していて、自発意思により場に応じて「〜太夫」といった「アイデンティティ・スイッチング」を行うことが「公式の世界よりもはるかに魅力的だった。要するにおもしろかった訳だ」(池上, 56 ページ)と池上の研究を紹介する。

その後の先行研究として、戦後のサークル運動に言及しているのは、藤井のクラブ型社会の論考と同様であるが、浅野は、特にサークル運動研究で鶴見俊輔を中心とした「集団の会」の仕事に言及している。鶴見は活動に参加する楽しさに2種類があることを指摘したとする。「一つは趣味に取り組むこと自体の楽しみ、もう一つはそれを誰かとともに行うことの楽しみ、いわばつきあいという楽しみだ」(浅野, 75 ページ)。鶴見は、趣味縁の特徴として、集団の中での自己の変容と多元化を指摘する。すなわち、複数のつきあいの中で「個人」は形作られるのであり、「自己とは単一の同一性というよりも、複数性を抱え込んだ多元的なものとみるべきだということになる」(浅野, 77 ページ)。そうした個人の内なる多元性は、生に柔軟性をもたらすある種の豊かさであり、サークルはそれを育てる土壌だと鶴見は見做した、とする。

浅野は、続けてもう一人、山崎正和『柔らかな個人主義の誕生』(1984年, 中央公論社)を取り上げる。浅野は1980年代についての山崎の分析を次の3点にまとめる。第一に、有用性から楽しみへの変化。第二に、個人化。「一人一人が自分自身に固有の趣味を形成するようになる」(浅野, 81 ページ)。第三に、社交の持つ意義の向上である。自分なりの趣味を持つ人々は、かけがえのない個人として承認されることを望むようになる、という。そのような承認は定型的な役割に終始する職場や家庭では得がたく、一方で職業としての生産集団に所属しながら、他方で「広い社会のもっと多元的な場所を求め始める」と山崎は予言している。

浅野は最後に、山崎が予見した社交の展開を、フェミニストの社会学者という立場から、女性同士のつながりに見出し、「女縁」と命名して分析を行った上野千鶴子の仕事を紹介する。上野は、前出の1985年のシンポジウムで、地縁・血縁以外の残余カテゴリーとなっていた社縁を、「選べる縁・選べない縁」で再整理した。そして「選択縁」について、第一に自由で開放的な関係、第二にメディア媒介型の性格、第三に過社会化された役割からの離脱という側面を指摘している(1985, 229-230 ページ)。

浅野は上野の分析から「こうした選択性の高い集団へ

の多元的帰属は、(中略) 各々の場での失敗が致命的とはならず、別の場への移動という選択肢も担保されている」(浅野, 83 ページより抜粋まとめ) とし、上野の「自分の中にあるアイデンティティの多面性をうまく配分して、たった一つに絞らない」という「アイデンティティのリスク・マネジメント」の重要性について言及している(浅野, 83 ページ)。

そして、これらの先行研究を踏まえながら、1990 年代の若者の趣味縁としてオタク系文化に注目し、2007 年東京都杉並区において行った趣味縁調査のデータを元に、趣味縁と公共性を巡る論考を展開している。

5. 趣味縁の特色とは

以上の趣味縁を巡る先行研究を立ち上がりから現在まで概観してみると、共通する幾つかのキーワードが浮かび上がる。

第一に、趣味縁の社会的「有用性」からの逸脱である。井上の論考では、1980 年代以降の趣味縁について「目的志向型から愉しみ志向型へ」への顕著な傾向が指摘されている。これは、生産活動優位の職場の価値観とは異なる行動原理であり、効率性、経済性を離れ、優れて個々人の恣意性による選択が可能となる領域である。故に趣味縁は原則として個人的、私的性格を持つものであり、血縁・地縁・会社縁などを離れて個々人の特性が露出しやすい領域となっている。

第二に、趣味縁は、加入も脱退も個人の自由意思によって行うことが出来る「選択縁」(上野, 1985 より)であることが挙げられる。上野は、加入脱退が自由な二次的な集団を指すとされる結社(社縁集団)であっても、自由な選択が実際には厳しい場合も多いことを指摘する(1985, 228 ページ)。例えば、勤務先の会社縁は、一度就職すると降りるには相当な覚悟が要る(上野, 同, 228 ページ)。特に 2017 年現在の日本社会では、中途離職者が再度正社員として雇用される可能性は決して高くない。臨時職として再就職しても、給与や福利厚生などの待遇が往々にして前職より格段に低くなる。市民が会社縁を降りる自由は生計リスクと表裏一帯であり、選択縁と言いつつ実際には、おいそれとは降りられない。これに対して趣味縁は、生計や教育とは原則無縁の領域にあり、当事者の興味関心次第で任意に「選べる縁」であり、原則本人の自由意思以外に拘束性が無い。

第三に、所属する社会集団内での既存の役割からの解放(脱役割)と変身が可能であることである。上野(1985)は選択縁がすべての定型化された役割の残余カテゴリーであることを指摘し、逆に選択縁の社会こそが「個人に

個人としてのアイデンティティを供給する基盤である」(230 ページ)とする。言い換えれば、趣味縁によって、個人は自己のアイデンティティの振幅を確認する実験が可能であり、職場や学校などの帰属集団では発揮しきれない己の全人性を、各自が望む形で模索し補填し拡充することが出来ると言える。

以上のような趣味縁の先行研究を踏まえ、以下、第Ⅲ章では、群馬県前橋市の都心部に誕生した趣味縁の拠点の設立経緯と活動をそれぞれ確認する。

Ⅲ 対象事例：前橋〇〇部(群馬県前橋市)

1. 前橋〇〇部

趣味縁が社会的「有用性」を離れたところにある、個々人の選択性、参加の自主性によって成立する領域だと考えるとき、群馬県前橋市の中心部において 2012 年 2 月に始まった「前橋〇〇部」(2012 年 2 月 11 日設立)は、そこに現れる関係の軽やかさ、拘束性のなさにおいて、非常に特徴的な活動形態である。

前橋〇〇部とは、Facebook(以下 FB と略称)を活用して、前橋市を舞台に何らかの活動をする際に「前橋〇〇部」の〇〇にそれぞれの活動名称を与え、それを見て共感した希望者有志と一緒にそれを実行するだけの活動である。例えば、市民の誰かが FB 上で、「今晚一緒にカレーを食べて帰ろう」と投稿し、それを見て共感した人々と「前橋カレー部」が発足する。そして発起人が部長となって、一緒にカレーを食べて帰る。その活動の様子は、写真や文章で随時 FB にアップされる。次回を開催するかどうかは参加者たちの気持ち次第である。他にも「前橋自転車通勤部」、好きな食べ物を契機に集う「前橋葡萄酒部」「前橋ラーメン食べ歩き部」、妄想によるラジオドラマを製作しラジオ放送する「前橋妄想部」など、活動テーマや継続の有無、参加資格においても何ら制限がない。前橋〇〇部とは、前橋で市民誰もが気軽に参加主体となれる活動プラットフォームの総称なのである。

この前橋〇〇部の活動は、2017 年 6 月に地元のゆたろ編集室が、WEB の特集連載記事をまとめ、『本気で遊ぶまちの部活 群馬県前橋市 前橋〇〇部』と題して出版された。その中で、前橋〇〇部の部長、藤澤陽が、これまでに誕生した部活数は、数百に登ると“推定”している。同書で藤澤は、次のように語っている。「FB 上で①宣言する→②共感を得る→③実行する、という三つのアクションだけで部活が生まれる」(p.12)、「創部のための手続きなど一切行っていないし、うまくいかない、つまらないと感じたら、すぐに活動をやめればいい、という気軽なスタンスにしているため。とにかく“敷居は低く”がモッ

トー」(12ページ)。

実際に行われている活動は、市民個々の専門性や技能、趣味嗜好の反映の場合も勿論あるが、些細な日常活動の場合も多い。前橋〇〇部について2003年以降の群馬県の地域づくり団体を研究してきた友岡は、前橋〇〇部と同時に、「群馬県全体を『教室』と見立て、県内各地で『授業』と称するさまざまな事業を行う」(22ページ)ジョウモウ大学の2事例を分析している。両事例とも「規約を嫌い自生的秩序の形成を志向する」(友岡, 25ページ)とする。特に前橋〇〇部については「衰退した前橋の中心市街地の再活性化が念頭に置かれていないわけではないが、それを活動目標として前面に出すことはしていない。むしろ個々人の何かをしたいという欲求を周囲の人々がバックアップし、盛り上げる状況を作り出すことが、結果的に街の賑わいをもたらすという構図の創出がねらわれている」(24ページ)とする。「参加者のモラルや意識の高さによってこうした取り組みが継続されるのではなく、人々が個人として自らの楽しみを追求した帰結として、地域コミュニティが再構築されることを企図するという、アーキテクチャ論的な発想がここにはある」(23-24ページ)とする。

つまり、ここでの趣味縁は市民の参加の契機であり、その集団での追求が活動目的でもあるのだが、彼らの個々の活動がエリアの活気に反映されるようなアーキテクチャ論的な活動デザインになっているのである。次節では、前橋〇〇部の設立経緯を簡単に紹介する。

2. 前橋〇〇部の地理的背景と誕生まで

前橋〇〇部の設立背景には、前橋の中心商店街の深刻な空洞化がある。前橋市は群馬県庁所在地であり、2017年6月末現在で人口約33万8千人である。前橋市役所、群馬県庁のすぐ近くに縦横に展開する9つの商店街は、洋服、薬局、花屋、手芸店、喫茶店や蕎麦などの飲食、和服、玩具、魚屋、八百屋などが並ぶ昔ながらの商店街である。朝晩の通勤通学ラッシュ時を除けば通行量の減少が続いており、店舗を既に取り壊したママの更地や駐車場、建物は残っているものの恒常的にシャッターを閉めたままの店舗も数多い。

前橋市が発表した「前橋市中心市街地活性化基本計画(2017)」(11ページ)の「中心市街地・活性化区域内の商業の推移 表4」によると、商店数は1988年(昭和63年)から2014年(平成26年)ではほぼ3分の1に減少、年間商品販売額もピークの1991年(平成3年)から2014年(平成26年)で3分の1に急減している。同じく「歩行者・二輪通行量の推移」(資料編、74ページ)

でも、一番通行量が多い「スズラン新館北口前」が1994年(平成6年)の約2万人弱から、2015年(平成27年)には2,498人と、往時の約13%にまで急落している。特筆すべきは、最新一つ前の「前橋市中心市街地活性化基本計画」(H26年3月改訂版)に掲載されている「商店主アンケート調査(平成18年度)」で、前橋の9本の商店街の店主156人が回答しており、「今後とも商売を継続したい」が全体の7割を越え最多となっているのである(15ページ)。シャッター店舗が多いにも関わらず、店主の7割以上が「現状維持」志向なのだ。

こうした前橋市中心市街地の状況について、「事業所は年々減少しており、平成3年から18年の15年間で420軒もの事業所が減少していること、特に小売業の減少が著しいこと、中心市街地全体に空き店舗・駐車場が多く存在し広く分布しているため、空洞化が起きていること」が指摘されている(名瀬, 2014, 3ページより抜粋まとめ)。

藤澤は、2011年3月に前橋市にUターンして、この商店街の衰退ぶりにカルチャーショックを受けたと言う。当時の思いを「シャッターだらけの商店街同様、人と人の間にもシャッターが下りているように感じました」(上毛新聞, 2014年1月5日のコラム)と藤澤は綴っている。「イベント運営に携わっていた前職の経験を生かして、この街でイベントを起こすことは簡単でしたが、(中略)街の文化やにぎわいにはつながらない。さらに、商店街や町内会単位で集まる既存の方法で街を盛り上げることはもう難しいと感じていました。では、これからの前橋のコミュニケーションの主軸となるものは何か?」(藤澤, 上毛新聞, 同)

藤澤が一人でそうした疑問と葛藤を抱えていた時期に、自称「自転車通勤部」のメンバーに出会う。代表の岡田達郎、副部長の岡正己をはじめとする20~30代の学生や社会人など約20人が和気藹々と参加していた。「毎日、自転車で通勤・通学しているだけ」というその活動デザインに藤澤は触発される。「そうだ、これがこれからの前橋の方向性なのじゃないか。面白い人はいる。立派な街はある。あとはそれを生かす“受け皿”が前橋には必要だったのではないかな。使い慣れたFacebookを使うことで、無料で、容易に、既存の『場所に依存したつながり』に頼らない『好きなことでつながる』コミュニティが作れるのではないかな。」(上毛新聞, 同)。藤澤は「やりたいことをやって、それを部活にする」という「前橋〇〇部」を構想する。「この方法ならば今まで前橋で何かしたくてもできなかった人たちが一歩を踏み出せ、街の体温が上がるのではと確信しました。」(上毛新聞, 同)。藤澤は2012年2月21日、岡田、岡と3人で前橋〇〇部を立ち

上げた（『本気で遊ぶまちの部活』、2017、18-20 ページより抜粋まとめ）。

3. 商店街の中に「bushitsu」が誕生

最初は、藤澤ら創立メンバーが活動の呼び水に「前橋徒歩通勤部」や「前橋散策部」などを自ら投稿し実施していたが、同年4月以降から、市民による自主的な部活が立ち上がり始める。そして、気軽に部員達が集まれる場所として、2013年3月30日、「前橋〇〇部」全体のbushitsu（部室）が商店街の一画にあった空き店舗を借りて誕生した。前橋市弁天通り商店街の1階が20畳ほどの元カレー店、2階が住居空間の建物で、家賃は月額5万5千円と格安だった。2階部分には藤澤の友人の竹内躍人に管理人として月額30,000円で住んでもらい、1階部分をbushitsuとして自分たちで改装した。（『本気で遊ぶまちの部活』、37-38 ページ）。

前橋〇〇部の活動は、それまでフェイスブックというソフト空間（非場所）で展開されており、リアルな実施地点が中心部全域に拡散していたが、bushitsuの誕生はその活動をマチ中で「見える化」させ、その後の活動に弾みをつけた。

bushitsuを部活で使う際の費用は3時間1,500円。物販を伴う場合は2,500円で、利用希望者は藤澤氏にメールもしくは電話で連絡をするだけでいい。このbushitsuを拠点に「前橋葡萄酒部」「前橋帰宅部」などその後の主要な部活も立ち上がった。

筆者が2014年9月24日に部活「今年だけの夏が終わったね」に参加した時には、bushitsuの玄関から商店街通路に張り出して椅子が並べられ、自然に活動（雑談）が始まり、行きずりの通行人や顔なじみのメンバーが途中自由に出入りしていた。「シャッター街のど真ん中に突如現れた不思議な空間」（同、42 ページ）だが、商店街の人々は慣れた様子で笑って受け入れていた。

オープン後は、FBの投稿を見た人たちが気軽に遊びに来るようになった（同、43 ページ）。藤澤達も、シネマ上映会やトークライブ、パーティーなどのイベントを次々と仕掛けていった。『『自分の家でもない、人の家でもない、最高に居心地のいい空間』が生まれたことで、閑散としていた弁天通りに若い人たちの姿が戻ってきました。朝から夜まで、何やら楽しそうな空気をまとった若者たちが通りを往来するようになったのです』と同書は、bushitsuが商店街にもたらしたインパクトを語っている。

bushitsuは、2016年5月末、管理人であった竹内の引越を契機にその役割を終え、2017年6月現在では新たな商業店舗となっている。

4. 小売の集積空間（商店街）の中の趣味縁

筆者は2014年9月、2016年6月、2017年3月と6月の4回の現地調査で、各10日前後滞在し（2017年6月のみ3日間）、前橋の9つの商店街を連日、可能な限り歩き回った。その結果、一見すると典型的なシャッター店舗だが、実際にはシャッターの向こうで空間用途の変質が起きている物件も少なくないことが徐々に理解されて来た。例えば、小売を伴わないアーティストの制作工房やbushitsuのような趣味縁の拠点になっていたり、若者向けのシェアオフィスなどに転用された建物もあった。

本来、商店街は不特定多数を相手にした対面小売の商業空間の集積である。その衰退の背景要因について、木村（2015）をはじめとする先行研究では以下のように指摘している。すなわち、該当エリアの事業所数や居住人口の減少、住民の高齢化による消費縮減、郊外型大型ショッピングモール開店による客足の減少、また商店街内部での既存店による同業種の出店忌避、商店街の店舗が主たる収入源ではなくなっているためシャッターのままで困らない家主、あるいは特定取引先との商売を確立しているため不特定多数相手の店舗営業が不要、などの諸事情が現代社会の商店街をそれぞれに取り巻いている。前橋市の商店街も、決してその例外ではない。

主要産業（本事例の場合は小売業）内での自律的持続的な再生産（A店が退出してB店が入居するなど）が機能しなくなっているのなら、地域社会の中で活力を保ちつつ空間を有効に利用するには、商業以外への用途転換をも視野に入れなくてはならない。

そうした状況下で2010年以降に起こったのが、土地と建物を非商業目的で再利用する前橋〇〇部ほか、上記市民拠点群の参入であった。こうした拠点群は商店街の既存業種のどことも競合しないニューフェイスである。大家にとっては店舗を手放す必要はなく、建物が利用可能な状態で維持され、安価であっても家賃収入が入る。加えてシャッターを開ければ、商店街活性化への貢献の大義も果たせる。商業地としての衰退が、従来は高嶺の花であった都心の賃貸物件を一般市民が無理なく活用できるように準備したのは、ある意味皮肉な結果ではある。

以上で見てきたように、鉄道や写真撮影、モノづくり、食べ歩きなど、私的な遊びの時空間で行われていた趣味活動が、商店街の遊休不動産を再利用して、集団で活動するための拠点が参入し始めた。それぞれに生計を維持するための本業とは別の、終業後や休日などの余暇時間で、市民有志が趣味縁によって街中に集まり、一緒に活動する。その私的領域での趣味縁活動は、社会的に優位とされる各自の社会的所属（職場、学校、家庭、地域など）

とは別個で、参加の選択自由が担保されている。そこでは旧来の所属領域(地縁・血縁・社縁など)では発揮できない個人の資質や嗜好の社会的な残余部分が、趣味縁による遊びに形を借りて正統な居場所を得、各自の全人性を補完している。

また趣味縁は、商店街やオフィス街などの実業の世界に対する「遊び」の領域の中にある。これによって、実業の世界で流通している旧パラダイム内では解決出来ない社会的課題に対し、全く新たな選択肢を提供することが往々にして可能になる。例えば、商業用途の集積空間である商店街が時流の中で衰退していく時、非商業用途での活動コンテンツで空家を埋め戻す、という選択肢が実際に起きている。それらがエリアへの来訪動機をもたらし、結果として通行量の増加や周辺のエリア価値回復につながり、周辺の空き店舗が埋まり始めたりもする。商業用途の旧レイヤーに、非商業用途という新レイヤーが、遊びの領域という別次元で併存することで、競合することなく、結果的にエリアの変化を誘発する事が可能になったと見る事が出来る。

bushitsu がオープンした2013年以降で、周囲に新規参入して来た店舗に目を向けると、福祉や介護、健康、住居、そして趣味縁といった商業以外の用途が多いことに気付く。例を挙げれば、2013年にオープンした美術館「アーツ前橋」の学芸員や地元アーティストがアーティスト・イン・レジデンスや展示、住居としても活用する拠点 Maebashi Works (2013年オープン)、展示やワークショップなど市民団体の活動拠点 MAP (旧称アーツ桑町、2013年)、クリエイターたちによるシェアオフィス「MCA (Frasco)」(2013-2016)、アーティスト八木隆行が主宰する現代美術のギャラリー Ya-gins (2012年)、また学生のシェアフラット馬場川 (2014年) 等やクリエイター達の共同事務所 m BOX (同) などが、商店街周辺に集積している。地域の子供たちが気軽に集まれる場所として作られた個人営業の駄菓子屋「わがじゃん」(2009年)や、アマチュアを中心にした二次創作や現代アートの発表拠点「Gallery アートスープ」(2015年)などもある。他にも外見だけでは分からないが、絹織物のアーティストが、空き店舗を一軒まるごと借り受け、建物を生活と創作と養蚕の場として使っているケースもあった(2017年、商店街から近隣へ転出)。

結果として、福祉や介護、住居を別にすると、アートや趣味縁が商店街の用途転換を媒介している姿が見えてくる。趣味縁は選択縁であり、本人の興味や関心がうつろうとともに消滅しさえもする。法人格を持ち各種の社会的契約主体である商店主達の中であって、趣味縁の運

営主体は、決して堅固な組織とは言い難い。しかし、趣味縁をはじめとするこれらの新規拠点群が、エリアに今日的な新たなコンテンツと市民の来場動機を形成しており、筆者の参与観察でも展示やイベントの折には、少なからぬ来訪者の流れが形成されていた。

前橋市の事例の地理的背景は、対面小売の商店街という社会的有用性の産業空間である。しかし、その用途は必ずしも現代のニーズに合致しなくなって来ている。だが、それら遊休不動産のオーナー達の事情にはバラツキがあり、旧来の商店街や自治会などの単位で構造的な変化を起こすのは困難になっている。シャッター店舗のままで空間が固定されてしまい、物件の所有権と利用権を切り離すなど、いかにして空間に利用の流動性を持ち込めるかが、まちづくりの先行研究でも模索されてきた。

前橋の空洞化する商店街にあって、社会的有用性つまり商売ではなく、「遊び」として参入しているのが、bushitsu を始めとする趣味縁の拠点であると言えることが出来る。

ここで、本稿の前半Ⅱ-5で述べた趣味縁研究に共通する特徴を再掲する。

- ① 社会的「有用性」からの逸脱
- ② 選択縁であること
- ③ 所属する社会集団内での既存の役割からの解放(脱役割)と変身が可能

①の要因については、趣味縁は「遊び」の領域にあるがゆえに、商店街の既存のどの業種とも競合しない。非営利、市民有志、活動内容が個々人の興味関心のみで維持される趣味縁という社会的な脆弱さゆえに、逆に、既存業種にも大家にも警戒されにくく、商店街の隙間に参入しやすかったと言えるだろう。

そして②の選択縁であることにより、前橋〇〇部はオールジャンル、自主申告制なので、原則として、あらゆる市民が参加可能なプラットフォームであり、結果的に、それまで商店街に縁のなかった市民のエリア来場動機を新たに形成することに成功した。

そして③の所属する社会集団内での既存の役割からの解放(脱役割)と変身が可能であることについては、前橋〇〇部などの趣味縁活動の周辺で、時空を限定した「遊びの時間」での変身のみならず、そうした時間の蓄積の上で、本業を変えてしまった趣味縁のコアメンバーが数名、現れているのだ。これは、生計を維持するための本業に軸足を置きながら、自らの本業もしくは本業以外の内的資質や技能を活かした隣接領域で社会参加と自己実現を拡張するというハーフシフト(加藤, 2016)ではなく、フルシフトである。筆者はこれを、趣味縁の場が自己の

アイデンティティや潜在技能についての実験場となり、市民の潜在能力の新たな社会的発現を補佐するプラットフォームとして作用したものと捉えている。正に既存の役割からの解放（脱役割）と変身が実際に起っている。

結果から見て、前橋〇〇部の活動は、上記の趣味縁の3つの特色が現代的な形で機能しており、趣味縁であったことにより衰退する商店街への参入障壁が下がり、その後の波及効果がもたらされたものと筆者は考えている。

このように、趣味縁が、衰退した商店街やオフィス街など、既存産業の文脈で固定化してしまった遊休不動産の再利用と、ステイクホルダー達との関係構築に新たな流動性を持ち込めることの意義は、今後さらに精緻に検証していく必要があるであろう。

IV まとめ

以上、趣味縁の拠点がなぜ時として、まちづくりの文脈において活性化などをもたらすのか、趣味縁そのものの先行研究の整理を行うことで、論点整理を行った。趣味縁は、エリアの主幹産業の当事者の利害関係に抵触せず、誰もが共に乗ることの出来る別次元のプラットフォームを同時に出現させる。その遊びの領域にある脆弱さ、選択縁であることによる持続性のなさ、本来の帰属社会の役割からの解放が、その背景にある。結果として、エリアに本来の空間用途とは異質な価値体系による遊びの領域を具現化させており、商業空間の半ば固定化した遊休不動産に流動性をもたらす契機として、またエリアに新たなコンテンツを持ち込む手段としても、有効であると言える。

趣味縁が、遊びの領域にあることは、既存の業界やステイクホルダーの警戒感を弱め、エリアに参入しやすくしている。こうした趣味縁の時空間では、従来の産業内では発現できなかった様々な実験を「大人の遊び」の名目で可能にしている。また、職場と家庭の往復では会はずのなかった人々や体験を実現させている。趣味縁空間と従来の商業空間は、一時的かもしれないが、補完しあう新たな関係系を築いていける可能性がある。今後の研究課題として、具体事例からその循環を例証していきたい。

〈謝辞〉

調査にご協力いただいた前橋〇〇部の関係者の皆様、前橋の商店街の皆様、ジョウモウ大学の皆様、群馬県文化関係者の皆様、特に本研究に貴重な示唆を下さり群馬県での調査を全面的に応援して下さいました友岡邦之先生に、この場を借りて篤く御礼申し上げます。

注

- 1) このシンポジウムは1985年2月20日から22日までの3日間、国立民族学博物館において館内外の研究者を集めて開催されたもので、1987年にドメス出版より報告書が「現代日本文化における伝統と変容3 日本人の人間関係」として出版された。本研究でのこのシンポジウムへの言及はすべて同書の記載に依る。
- 2) 「社縁」とは、もともと「結社縁」の意。血縁・地縁を除くすべての人間関係を指す名称である。(上野, 1987, 226 ページより抜粋まとめ)
- 3) 2016年6月21日、前橋市内での藤澤陽氏へのインタビュー取材より

参考文献

- 浅野智彦『趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店、2011年。
- 藤井知昭「クラブ型社会の可能性」、栗田靖之編『現代日本文化における伝統と変容3 日本人の人間関係』ドメス出版、1987年、184-194 ページ。
- 藤田英典「学校化・情報化と人間形成空間の変容：分節型社縁社会からクロスオーバー型趣味縁社会へ」『現代社会学研究』、4巻、1991年、1-33 ページ。
- 池上英子『美と礼節の絆』、NTT出版、2005年。
- 井上忠司「社縁の変容」、栗田靖之編『現代日本文化における伝統と変容3 日本人の人間関係』ドメス出版、1987年、244-259 ページ。
- 上毛新聞（2014年1月5日）「視点オピニオン21」、前橋〇〇部部長、藤澤陽、「前橋〇〇部」の誕生好きなことでつながる available at http://www.jomo-news.co.jp/ns/series/5613893349822389/opinion_detail.html (2017年7月12日最終閲覧)
- 加藤康子「アートを核としたコミュニティに見られる『生きづらさ』を乗り越える契機とエンパワメントについて—札幌のOYOYOゼミの事例から—」、『国際広報メディア観光学院ジャーナル』、20、2015年、35-54 ページ。
- 加藤康子「アートと趣味縁の拠点における「非クリエイティブクラス」のハーフシフトについて：札幌市のOYOYOゼミの事例から」『文化経済学』、第13巻1号、2016年、36-44 ページ。
- 木村隆之「遊休不動産を利用した「利害の結び直し」として読み解かれるソーシャル・イノベーション：滋賀県長浜市株式会社黒壁と福岡県北九州市株式会社北九州家守舎の事例」、日本ベンチャー学会、

- 『Venture review』第25巻，2015年，47-59ページ。
- 前橋市中心市街地活性化基本計画（2014）（H26年3月改訂版）（計画期間 平成23年4月～平成28年3月）
前橋市
- 前橋市中心市街地活性化基本計画（2017）（計画期間 平成29年4月～平成34年3月） 前橋市
- 名瀬弘人「中心市街地活性化対策としての学生を対象としたシェアハウスの検討」（前橋工科大学工学部社会環境工学科、2012年度卒業論文、要旨、1-9ページ）available at <http://www.maebashi-it.ac.jp/~yuzawa/paper%20nabuti.pdf> 2015年5月25日最終閲覧、現在は削除されているがダウンロード済みのものを参照した。
- 集団の会『共同研究 集団』，平凡社，1976年。
- 友岡邦之「地域振興団体における領域横断性と『中庸のネットワーク』：群馬県の事例にみる新しい組織論的特性の分析」、『地域政策研究』，17（4）：2015年，19-31ページ。
- 上野千鶴子「選べる縁・選べない縁」，栗田靖之編『現代日本文化における伝統と変容3 日本人の人間関係』ドメス出版，1987年，227-243ページ。
- 上野千鶴子「選べる縁・選べない縁」，井上忠司他編『文化の地平線』，世界思想社，1994年。
- 上野千鶴子『「女縁」を生きた女たち』，岩波書店，2008年。
- 山崎正和『柔らかな個人主義の誕生』，中央公論社，1984年。
- 「ゆたり」（WEB マガジン）の特集連載記事（2016年1月27日～8月23日） 地方に暮らす。[前橋〇〇部] 第四話「bushitsu ができた！」
第四話 available at http://www.yutari.jp/chihou/chihou_maebashi/cc160414.htm (2017年3月22日最終閲覧)
- ゆたり編集室『本気で遊ぶまちの部活 群馬県前橋市前橋〇〇部』地方に暮らす。シリーズ3，ゆたり出版，2017年